

2021年10月3日 礼拝説教要旨

詩編講解説教80「涙のパン」

詩編80：2～8、ヨハネ6：48～51

詩編第80編は「民の嘆きの詩編」になります。イスラエル民族の嘆きと言えば、やはりバビロニアによって国を奪われた亡国の嘆きが中心となりますが、実はこの第80編はそれだけではありません。もともとイスラエルはダビデ、ソロモンの時代一つの王国でありました。しかしその後、北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂することになります。列王記上12章前後にその経緯が記されております。この対立は非常に根深いものがありまして、例えば、新約聖書の福音書にサマリヤの女の話や良きサマリヤ人のたとえ話が出てきます。その話の中でユダヤ人とサマリヤ人は仲が悪かったという話をしますが、その原因はこの王国の分裂によるものです。北イスラエルは、サマリヤという場所に神殿がありました。一方、南のユダ王国はエルサレムに神殿があった。それぞれに礼拝の場所を持っていたのです。もともと一つの民族で、もちろん同じ神さまを礼拝しているわけですが、礼拝の場所を別にする。それだけこの対立が根深かったということです。

もう一つ、覚えないことがあります。七十人訳聖書では、第80編に「アッシリアに関わる歌」という表題がついています。かつてアッシリアという強国がありました。このアッシリアがパレスチナに侵攻し、紀元前722年に北イスラエル王国のサマリアが陥落します。北イスラエルの人々はアッシリアに連れて行かれました。同時にアッシリアは占領したサマリヤに異国、異教の民を移住させます。民族混淆、宗教混淆が起きました。聖書では列王記下17章にその話が出てきます。それゆえこのイスラエルの嘆きは非常に複雑であることが分かります。王国が分裂する悲しみ。同じ民族で、同じ神さまを礼拝している者同士がいがみ合い、対立する悲しみ。そしてアッシリアによって北イスラエルが滅亡する。そこに異国の民、異教の民が入ってくる。南のユダ王国もそういうアッシリアの脅威を間近に見ていたにも関わらず、やがて台頭してきたバビロニアによって紀元前587年エルサレムは陥落し、南ユダ王国は滅亡、捕囚の民となっていきました。そういう嘆きが複雑に入り組んでこの詩編は詠まれています。

その嘆きは「あなたは涙のパンをわたしたちに食べさせ、なお、三倍の涙を飲ませられます」（6節）という言葉に表されます。「パン」は日々の糧です。涙が糧になる。毎日、食事をするように涙を流すということでしょう。300年以上もイスラエルにはそういう国難が続きました。「いつまで怒りの煙をはき続けられるのですか」（5節）まるで終わりのない嘆きを体験しているような感覚でしょうか。それゆえに第80編では「神よ、わたしたちを連れ帰り、御顔の光を輝かせ、わたしたちをお救いください」（4節、8節、20節）この言葉が繰り返されます。「連れ帰り」というのは、早くこの嘆きの穴から引き上げてくださいということです。そして「御顔の光を輝かせ」とあるように、神さまが怒りではなく、祝福を与えてくださいという願いがあります。イスラエルの人々はそういう切なる祈りを祈り続けてきました。

しかも興味深いことに、この詩の謳い手は、南ユダのバビロニアによる捕囚を経験し、帰還して廃墟と化したエルサレムでこの詩を謳ったであろうと言われます。この詩人はただ自分たちの国、南ユダの復興だけを願ったのではありません。仲違いし、失われた北イスラエルの同胞たちも含めて全イスラエルの回復を願っています。その点がこの第80編を読むときに忘れてはならないことです。この嘆きの祈りの背景には、亡国、捕囚の嘆きももちろんありますが、

ここでは王国が分裂したまま、その痛みを抱えながら、ついになつていられないままそれぞれの国が滅んでいく悲しみ、嘆きがあります。だからこそ、この詩編がわたしたちの心のひだに分け入るような祈りの言葉になるのだと思います。

この嘆きはわたしたちと決して無関係ではありません。同じ民族、同じ信仰に生きながらも、仲違いし、お互いがいがみ合うということは珍しいことではありません。隣の朝鮮半島も南北に分かれています。かつてドイツも東西に分裂していました。同じ民族でいがみ合う。また同じ信仰でも分裂し、一つになれない痛みを抱えていることがあります。キリスト教も歴史を見れば、そういう分裂を繰り返してきました。対立し、戦争に発展していくこともあります。人間の罪がそうするのです。また身近な人間関係にもおいても、仲違いし、なかなか一つになれない。そういう痛みを引きずりながら、どうすることもできずに、わたしたちは日々生きているのではないのでしょうか。

列王記下の第17章で、アッシリアによってサマリアが陥落し、北イスラエルが滅びたときに、どうしてこうなったのか、昔を回顧する部分があります。その原因はわたしたちの罪、具体的には神ならぬものを神とする偶像礼拝なのですが、その罪の代償として、「主がダビデの家からイスラエルを裂き取られた」（17：21）と言います。今日の詩編で「涙のパン」とありました。日々の食卓でパンを裂くたびに、イスラエルの人々は思ったのでしょうか。自分たちはその罪ゆえに、神さまによって裂かれたのだということ。その裂かれた痛みを思い起こしては涙する。そういう涙をわたしたちも知っているのではないのでしょうか。

では、わたしたちに希望はあるのでしょうか。罪ゆえに分裂し、互いにいがみ合い、そのまま滅んでいくのを待つだけなのか。そうではありません。神さまはイエス・キリストを与えてくださいました。主がああ十字架でその身を裂かれ、わたしたちの罪の代償を引き受けてくださいました。わたしたちが引き裂かれるのではなく、主がご自身の体を引き裂いて、この罪を贖ってくださいました。そしてよみがえりの命をもって、わたしたちをもう一度一つに結びつけてくださる。ご自身の御体において、この裂かれた関係をつなぎとめてくださる。ご自身が涙のパンではなく、命のパンとなって、わたしたちをもう一度養われるのです。

今日、わたしたちは久しぶりに聖餐に与ります。これはわたしたちの和解のしるしに他なりません。神さまとの和解、そしてわたしたちの和解のしるしです。同じキリストの体を分かち合うときに、わたしたちはもう一度一つになることができる。その希望をこの主の食卓に見ていきましょう。